

## 新学習指導要領で求められる学力及び指導方法 の在り方に関する研究（最終報告）

新しい学習指導要領が告示された。この学習指導要領を正しく理解し、実践に向けての課題を整理することが喫緊の課題となっている。今年度の研究では、愛知県内の小中学校に対して新学習指導要領に関するアンケート調査を行った。アンケート調査の結果分析と「活用」を意識した授業づくりについて研究を進めた。研究を進める中で、「習得」と「活用」のつながりを考えた単元づくりと「資料を読み取る」「発表する」「学習を振り返る」といった学習プロセスを大切にしたい1時間の授業づくりを進めていくことが大切であり、授業改善の指針となることが理解できた。

〈検索用キーワード〉 確かな学力に基づく生きる力 習得 活用 活用を意識した授業づくり  
学習プロセス アンケート調査 授業改善の指針

### 研究会委員

|          |                 |                     |
|----------|-----------------|---------------------|
| 総合教育センター | 研究指導主事          | 稲吉 宣夫（平成20、21年度）    |
| 総合教育センター | 研究指導主事          | 坂田 貴仙（平成20、21年度）    |
| 総合教育センター | 研究指導主事          | 宮崎 千智（平成21年度）       |
| 総合教育センター | 研究指導主事（現教科研究室長） | 川澄 誠（平成20年度）        |
| 総合教育センター | 研究指導主事          | 貝沼 眞幸（平成20、21年度）    |
| 総合教育センター | 研究指導主事          | 中神 和也（平成20、21年度）    |
| 総合教育センター | 研究指導主事          | 加藤 文彦（平成21年度）       |
| 総合教育センター | 研究指導主事          | 加藤 応子（平成20年度）       |
| 総合教育センター | 研究指導主事          | 平手ゆり子（平成20、21年度）    |
| 総合教育センター | 経営研究室長          | 浅井 厚視（平成20、21年度主務者） |

### 研究顧問

|            |     |                 |
|------------|-----|-----------------|
| 名城大学教職センター | 准教授 | 平山 勉（平成20、21年度） |
| 稲沢市立稲沢中学校  | 校長  | 清水 茂（平成21年度）    |

## 1 はじめに

「変えてはならないものを変えない冷静さと 変えなければならないものを変える勇気と それを識別する英知を しっかり生かしていくべきだ」（『ニーバーの祈り』より）。新しい学習指導要領が告示されるたびに、教育委員会や学校では何を変えないで継続し、何を変えて断絶するのかという判断を迫られる。判断していくための指針が分かれば有難いと思う。

本研究では学習指導要領の歴史的な経緯を踏まえた上で、キーワードを整理し、新学習指導要領で求められる学力と指導方法、授業改善を進めていくための指針について考えた。

## 2 研究の目的

教育基本法が 60 年ぶりに改正され「教育の目標」（第 2 条）が規定されたことを受け、学校教育法に義務教育の目標が定められた。ここで示された教育の基本理念は、平成 20 年 3 月告示の新学習指導要領によって明確となり、「生きる力」「確かな学力」の育成が求められている。

学校教育法では身に付けさせたい学力を「基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力」（第 30 条第 2 項）と具体的に定めた。これらの改正を受けて、新学習指導要領では「確かな学力」に基づく「生きる力」を各教科・領域で具現化していくことが求められている。

本研究の目的は、活用を意識した授業づくり（①「習得」した知識・技能を「活用」し、さらに「習得」を繰り返すスパイラルな展開②「活用」の中で知識・技能の「習得」を図る逆向きの展開）を意図的・計画的に行う中で、授業改善を進めていくための指針について検討することである。

## 3 研究の方法

- (1) 当センター所員による所内研究として進めた。名城大学教職センターの平山勉准教授より、助言をいただいた。
- (2) 「学習指導要領の変遷」など歴史的経緯から、新学習指導要領の趣旨と求められる学力について研究を深めた。
- (3) 小学校 5 教科（国語・算数・社会・理科・図工）、中学校 5 教科（国語・数学・社会・理科・美術）、高等学校 2 教科（国語・数学）を研究対象とし、小中高 12 年間を視野に入れた研究とした。
- (4) 県内公立小中学校（名古屋市立を除く）で新学習指導要領に関するアンケートを悉皆調査として実施した。新学習指導要領の問題点や「活用」を意識した授業づくりを通して、現状の問題点や課題について把握した。
- (5) 研究対象の教科に関して、「活用」を意識した授業づくりを進めるために学習指導案を作成し、具体的な学力や指導方法の在り方について研究し、授業改善の指針について検討した。
- (6) 高等学校の新学習指導要領の国語と数学の主な改善点についても分析した。

## 4 研究の内容

### (1) 学習指導要領の変遷

昭和 22 年、23 年度に（小 22 年度 中 22 年度 高 23 年度）、アメリカの course of study を参考に「試案」としての学習指導要領が示された。社会科・家庭科・自由研究が新設され、子供の経験や関心に基づく教科課程、単元づくりが行われた。

昭和 26 年度の改訂（小・中・高共に 26 年度実施）では、にわかに作成した第一回目のカリキュラムを日本の学校に合うよう、「教科課程」から「教育課程」へ、「自由研究」から「教科以外の活動」（小学校）「特別教育活動」（中学校）へ、単元内容をアメリカの course of study の直訳ではなく、子供の実態に即した学習内容へと修正した。経験主義に基づく単元づくりの充実を目指すこととなった。

道徳教育に関しては、教科・領域を特設するのではなく、学校教育のあらゆる機会に行う道徳教育が展開された。生活経験に基づく社会科を進める文部省に対して、学者・教育研究団体からは「這い回る社会科」という批判がなされた。さらに、子供たちの「読み」「書き」能力への不満から低学力論争が起り、基礎・基本の徹底や教科の系統性を重要視する動きが顕著となった。これらの動きは、最近の

ゆとり教育とそれに対する批判の動きと重なる点が多い。また、戦争体験に基づく無国籍な世界市民の育成が目指され、郷土や国を愛する心を十分育てる教育が行われなかった。

昭和30年度の改訂では、単に社会科の改編だけが行われ、地理・歴史の系統的な学習が重視された。学習指導要領から「試案」の文字が削除され、その年より実施された。

昭和33年度～36年度の改訂（小36年度実施 中37年度実施 高38年度実施）では「学習指導要領は教育課程の基準である」という性格が明確にされた。道徳の時間が特設され、道徳的心情や道徳的価値を理解するための道徳教育が始まった。社会科では、昭和30年度の改訂に引き続き、系統的な歴史・地理学習となった。基礎学力を身に付けることや科学技術教育の向上に基づく教科の学習が進められ、子供の実態から教科の論理を優先した学習内容が展開されることとなった。

昭和43年度～45年度の改訂（小46年度実施 中47年度実施 高48年度実施）では、スパートニック・ショックを受けて、社会の進展に伴う、教育内容の現代化が進められた。特に理数教育の重視が声高に叫ばれることになった。しかし、授業時間数が最大となった上に、乱塾・受験戦争など、子供を取り巻く競争原理が過熱化した。そのため競争についていけなくなった子供たちの中には、問題行動を起こしたり逆に学校不適應を起こしたりするようになった者もあった。この現象が低年齢化したため、社会問題となり、学校制度や学習内容の見直しが迫られることとなった。

このような社会的要請をうけて、昭和52年、53年度の改訂（小55年度実施 中56年度実施 高57年度実施）では、学習負担の適正化が目指されることとなった。各教科の目標や内容を中核的事項に絞り込むことになった。学習内容が軽減され、学校裁量時間を新設し、特色ある学校づくりが進められた。教科の論理から児童生徒の実態重視へ基軸を転換することとなった。また、道徳教育では、地域・家庭・学校の連携の大切さが力説されるようになり、価値項目の徹底とともに、高度経済成長以後、力を失った家庭や地域に足場を置いた教育実践を行おうとした。

平成元年度の改訂（小4年度実施 中5年度実施 高6年度実施）では、従来「知識・理解・技能」に対して、副次的に置かれてきた「関心・意欲・態度」を学力の中核に位置付ける「新しい学力観」が強く唱導されることとなった。また、体験的な学習活動が重視され、生活科が新設された。

平成10年度～11年度の改訂（小中14年度実施 高15年度実施）では、詰め込み主義に抗して誕生した「ゆとり教育」の集大成が図られた。その中核として、自ら学び自ら考える「生きる力」の育成を目指して「総合的な学習の時間」が新設された。しかし、改訂されて間もなく、基礎・基本の不足を内容とした学力不足が深刻な問題となり、文部科学大臣による「確かな学力」向上のための緊急アピールが出されることとなった。

この流れを受けて、平成20年3月に小・中学校（小23年度実施 中24年度実施）平成21年3月に高等学校（高25年度実施）について告示された改訂では、「確かな学力」が「生きる力」の中核に位置付けられた。「知識基盤社会」「知のグローバル化が進展する」時代において、基礎的な知識・技能の習得とそれを活用した思考力・判断力・表現力の育成を重視した教育課程の編成が喫緊の課題となっている。今回の改訂内容はOECD（経済協力開発機構）のDeSeCo（キー・コンピテンシーの定義と選択）プロジェクトのPIISA（国際学力、国際学習到達度）調査に影響を受けており、カリキュラム編成の原理が「児童生徒中心」より「教科」の方へ軸が振れ、基礎・基本の充実が強く求められる内容となった。

また、教育基本法の改正を受けて、様々な教科・領域で、我が国の伝統文化の理解を重んじ、郷土や国に対する愛情を育てることが目指されることとなった。

## (2) 「確かな学力」に基づく「生きる力」

確かな学力の形成は「言語活動の充実」「理数教育の重視」「伝統文化の継承」「体験活動の重視」「小学校外国語活動の実施」の中で重点的に行われ、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「習得した知識・技能を活用した思考力・判断力・表現力などの育成」「学習意欲の向上や学習習慣の確立」を目指している。確かな学力は、知識・技能と生活を結び付けたり、知識・技能と思考力・判断力・表現力などの力と関連付けたりすることができる力であり、日常生活で生きて働く力である。学力には、目に見える学力（計測可能）と目に見えにくい学力（計測しにくい）とほとんど見えない学力とがあるが、知識・理解は、はっきり目に見える学力であり、思考力・判断力・表現力などは目に見えにくい学力である。

新学習指導要領の「生きる力」は、この「確かな学力」と「豊かな心」「健やかな体」との総体の側面を言う。新しい知識や情報や技術が氾濫する知識基盤社会において、「生きる力」は将来の職業や生活を見通し、社会で自立的に生きるためにますます必要な力であると言える。

## (3) 「習得」「活用」「探究」とは

新学習指導要領では「習得」「活用」「探究」の三つのキーワードが示されており、これらを基に新学習指導要領の内容を整理した。これらは、教師が指導を進める学習プロセス、学習類型（子供の側からは学習活動）を意味する用語と考える。

本研究ではこの三つの用語を峻別するつもりはない。これらの用語はお互い重なり、補い合い、双方向性をもつ言葉であると考え。その上で、「習得」とは基礎的・基本的な知識・技能を身に付けるように、反復練習を中心にして指導を進めることであり、また、「活用」とは習得した基礎的な知識・技能を実際に用いて課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力・その他の能力をはぐくむことと定義したい。さらに「探究」は教科で身に付けた「習得」「活用」の力を基にして、教科の発展学習や総合的な学習の時間で、問題（課題）を見付け、見通し、解決していく力を目指すものであり、自己の学びや生き方を振り返る力を身に付けるための学習と考えたい。

当然「活用」することによって、基礎的な知識・技能を「習得」することもありうるし、「探究」の中で「活用」「習得」の力を身に付けることもありうる。しかし、新学習指導要領がねらっている「活用」は、従来イベント的に偏っていた総合的な学習の時間を教科の力を基にした質の高い探究活動にしていくための力であり、教科横断的・教科発展的な総合的な学習の時間の在り方を目指す力と考える。

## (4) 「習得」と「活用」の関係と指導方法の在り方

本研究では、「習得」「活用」の関係について考えを深め、この二つの関係（つながり）に基づく具体的な学習活動を考えていかねばならないと考え、研究を進めた。

「習得」は知識や技能を身に付けることであり、覚えることであるが、覚えたことや身に付けたことを活用までできて、はじめて習得したと言えるのかもしれない。

「活用」は「書く」「考える」「話す」「説明する」「聴く」場面で、身に付けた知識や技能を使い、思考力・判断力・表現力を働かせることである。

「習得」と「活用」との関係について次にあげるかかわりがあると考え。

第一に、「習得」と「活用」が単に「習得」から「活用」へと一方向だけに高まるのではなく、スパイラルに「習得」から「活用」へ、さらに「習得」へと行きつ戻りつ、らせん階段を登っていくような高まりのある学習活動の展開を考えた。（「1－① スパイラルな展開」）

小学校4年の社会科で都道府県の名前と位置を暗記する。この知識を活用して、5年の日本の農業の学習では、日本地図のみかんやりんごの生産高の多い都道府県に色を塗る。時にはフリーハンドで日本地図をかいたものを使用してもよい。色を塗った地図を見て、日本の農業の傾向や特色について自分の言葉でまとめてみる。この知識を覚え、次の水産業の学習ではこれを活用して、日本の水産業の特色や工夫について予想をたてるのである。こういった学習活動の展開を「習得」と「活用」とのスパイラルな展開と呼ぶことにした。

第二に、「習得」と「活用」とを分けることになじまない教科がある。そういった教科では学習活動を展開する中で、知らず知らずのうちに知識・技能の習得が図られるのである。「活用」の中で「習得」が行われると言った方が正しいのかもしれない。（「1-② 逆向きの展開」）

小学校1年の音楽科「曲の中からおもしろい音をみつけよう」では、教材曲を鑑賞した後で、身近にある楽器などを用いて、聴き取った音を探したり、作ったりする活動を行う。曲の雰囲気や変化に合わせて、身体を動かしたり、言葉で発表したりする。このような活動を通して、音を見付けるための知識や技能さらに思考力や表現力を育てるのである。これは、特に図工・美術、体育・保健体育、技術・家庭、生活科などに多く見られ、「活用」から「習得」への逆向きの展開と呼ぶことができる。

さらに、「習得」した知識・技能を「活用」する場面が、教科の学習場面ではおさまらず、総合的な学習の時間や日常生活の場面で使用されることがある。教科の発展学習や総合的な学習の時間、さらに日常生活の実践を通して、つまり「探究」の段階で、再び知識・技能の「習得」が図られ、思考力・判断力・表現力などの活用する力が身に付く展開である。

小学校6年の総合的な学習の時間で、「ふるさと学習」を行い、郷土の人物について各自がテーマをもって探究する。この学習で一人調べをしたり、発表のためのポスターを制作したりするためには、資料を活用する力・文章を書き表す力・説明や発表する力等が必要となってくる。また社会科の歴史の知識があった方がまとめやすいだろう。このように「探究」活動を展開することで多くの知識を「習得」し、様々なことを考え、表現し、妥当な結論を導く「活用」を行い、能動的な知性が養われる学習展開が考えられる。

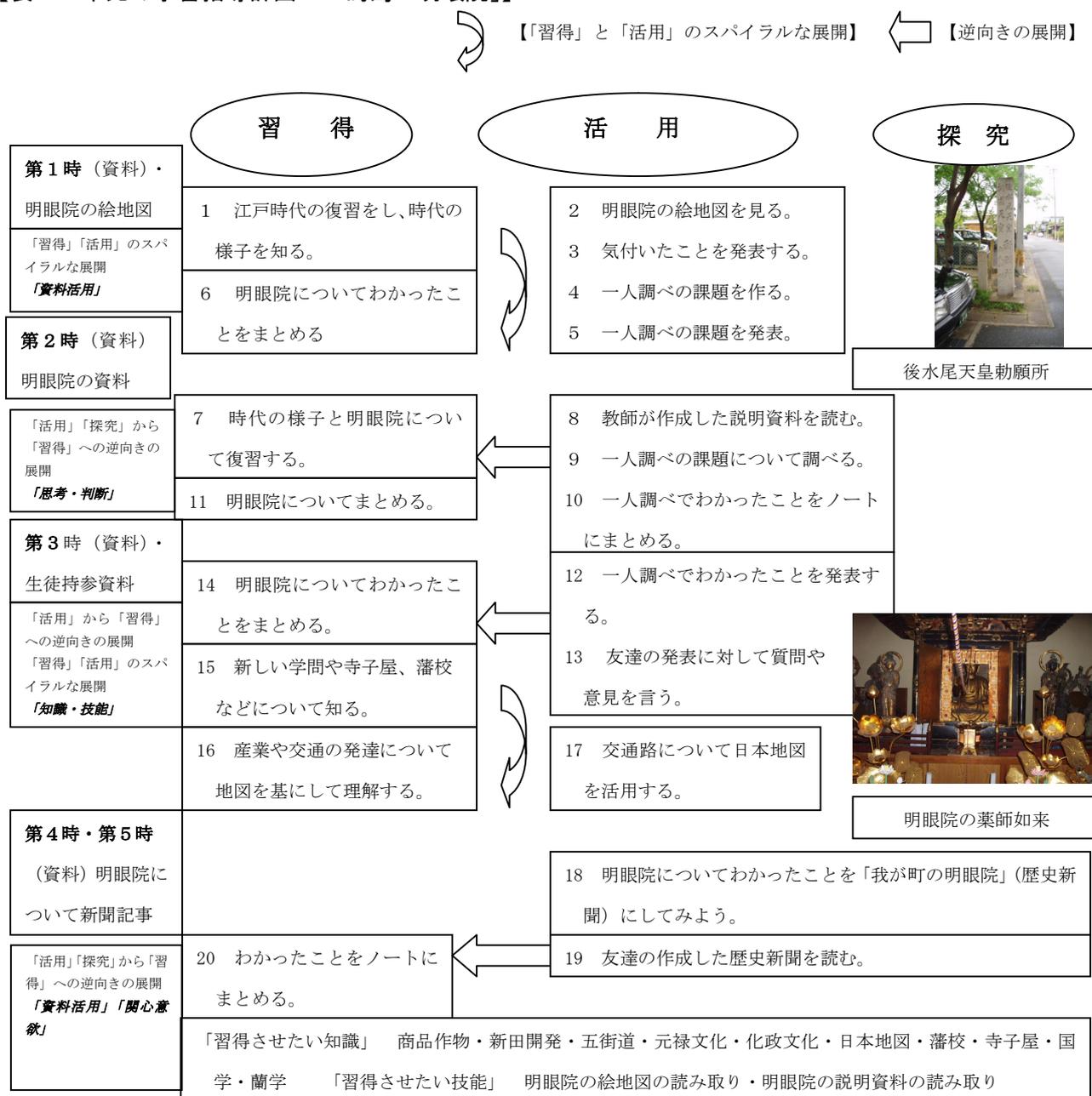
## (5) 単元の学習指導計画における「習得」と「活用」の関係

単元の学習指導計画を立てる中で、「習得」と「活用」の関係が、どのようなかわりとなるかを考察した。ここでは具体例として、中学校2年の社会科歴史的分野(4)近世の日本 ウ「産業や交通の発達、教育の普及と文化の広がりなどを通して、町人文化が都市に形成されたことや各地方の生活文化が生まれたことを理解させる」（「新しい産業・文化・学問の発達」）の単元で、愛知県海部郡大治町にある「馬島・明眼院」を教材として取り上げた実践を紹介する。

「馬島・明眼院」は海部郡大治町馬島にある天台宗の名刹で南北朝時代から明治時代を通じて、500年にわたって、日本の代表的な眼科の病院であった。常に治療方法の研究を重ね、清眼僧都以来実に様々な治療を実施してきた。特に江戸時代の末には、円如が長崎のシーボルトのもとでオランダ医学を学び、和漢蘭眼科を折衷したものとなっていった。「明眼院」で行われたり、全国に広められたりした眼科の治療方法を馬島流眼科と言っている。

本来死んだ人を埋葬する寺院が、生きている人間を大切にする病院であり、現在の大学病院以上の日本を代表する眼科の病院であったということは驚くべき事実である。仏の道を医学による治療で説いたのであろうか。実際の眼科の治療方法と薬師如来に対する信仰心（精神療法）とが結び付き、効果を

【表1 単元の学習指導計画 「馬島・明眼院」】



あげていたようである。円山応挙・本居宣長など多数の有名人が訪れた。

ところが明治7年(1874)「医師開業の試業規則」が出され、病院及び診療所以外での治療が禁止されることとなる。近代化を急ぐ明治政府にとっては、制度として病院による治療を強制することが西洋に追いつく方法であり、薬師如来に対する信仰心などまやかしにすぎなかったのである。どれだけ病気を治すことができたとか、患者や馬島周辺の人たちにとってありがたい寺院だったとかということは、明治政府にとっては関係なかったのである。絶えず時代の最先端の医学を担ってきた「明眼院」が近代化を阻害する障害物となったのは、歴史の皮肉であろうか。こうして「明眼院」は近代化政策の犠牲として、歴史の中に取り残されることとなる。

教師の作成した「馬島・明眼院」の説明資料を基にして、生徒は一人調べを行う。その学習活動を通して「習得」「活用」がスパイラルな展開となったり、「活用」から「習得」への逆向きの展開となったり、さらに「探究」から「活用」「習得」への展開が見られたりする単元を考えた。

## (6) 1時間の学習指導案における「習得」と「活用」の関係

1時間の授業の中で「習得」と「活用」のかかわりについて、前述した単元「馬島・明眼院」の第1時の展開を具体例として取り上げて考察した。

【表2 1時間の学習指導案「馬島・明眼院」第1時】

【「習得」と「活用」のスパイラルな展開】

| 段階 分  | 学習活動  | 指導上の留意点  |
|-------|---|--|
| 習得 5  | 1-1 江戸時代の復習をする。 【知識】  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・大切な年号、五街道、元禄・化政文化について発表させる。</li> <li>・人物、五街道は漢字で書くよう指導する。</li> </ul>   |
| 習得 5  | 1-2 江戸時代の様子を想像する。 【技能】  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・各自の江戸時代のイメージを発表する。・なぜそう思ったのか、根拠についても一言発表させたい。</li> </ul>   |
| 習得 5  | 2 明眼院の絵地図を見る。 【資料活用】  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・気付いたことをノートに書くよう指示する。</li> </ul>  |
|       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・絵地図を活用して、一人調べの課題をもつ。</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>「今よりも大きい」「〇〇坊がたくさんある」「宿屋がある」「家や街道がある」など気付いたことをまとめさせたい。</li> </ul>   |
| 活用 20 | 3 明眼院の絵地図を見て、気付いたことを発表する。 【資料活用・思考】   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・絵地図のどこからわかったか、根拠を一言発表させたい。</li> <li>・既習した「国学・蘭学」「化政文化」「街道」などについてもかかわりに気付かせ、発表させたい。</li> <li>・「目に見えること」「目に見えないこと」にわかる内容を分け、現在の姿と比べて発表させたい。</li> <li>・明眼院に対する江戸時代の馬嶋村の人たちの気持ちを考えて発表させたい。</li> <li>・友達のよい気付きについて、ノートにメモをとらせたい。</li> </ul> |
|       |  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block; margin-left: 10px;">現在の明眼院</div> |  |
| 活用 5  | 4 明眼院について一人調べの課題をつくる。 【資料活用・思考】   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・一人調べをしていきたい課題をノートに書かせる。</li> <li>・どんな資料で調べたらよいかを考えさせたい。</li> </ul>   |
| 活用 5  | 5 一人調べの課題について発表する。 【思考】   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・友達のよい課題について、ノートにメモをとらせたい。</li> <li>・一人調べでどの課題をどの順番で調べていくかを定める。</li> </ul>  |
| 習得 5  | 6 明眼院についてわかったことをまとめる。 【知識】  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・1時間の授業を振り返り、わかったことをノートにまとめる。</li> <li>・次時の一人調べの計画を考えさせたい。</li> </ul>   |

習得した知識・技能を基にした授業を考えたい。例えば、前掲の学習指導案では、導入(学習活動1-1 1-2)において前時で習得した江戸時代の知識を復習する。その知識を基にして江戸時代のイメージをもつ。次の展開(学習活動2, 3)において、明眼院の絵地図を基に気付いたことをノートに書き、発表する。これは資料を読み取り、活用する内容となっている。展開の後半(学習活動4, 5)ではさらに自分が選んだ課題について一人調べを行い、ノートを見ながら、調べた内容を発表する。学習のまとめ(学習活動6)では、分かったことをノートにまとめ、知識の習得を図る内容となっている。このように1時間の授業の中で、「習得」を基に「活用」が行われ、結果として新たな知識・技能の習得が図られることとなっている。

## (7) 県内小中学校における新学習指導要領に関するアンケート調査

平成21年7月当センターでは、県内の公立小中学校(名古屋市を除く1,026校)を対象として、新

学習指導要領への対応と「活用」に関する学習活動についてアンケート調査を実施した。すべての学校から回答を得た。このアンケートは、思考力・判断力・表現力を育てるため、各学校がどのような学習方法や指導方法が有効と考えているかについて実態調査を行ったものである。質問項目の内、特徴的な傾向について以下に述べる。他の結果については資料1 (P.14～) を参照されたい。

#### ア 「確かな学力を育てるために『活用』という学習活動は大切か」について

小学校で712校(723校中)、中学校で293校(303校中)小中全体の95%以上が活用は大切な学習活動と回答した。また「活用」を意識した現職教育なり授業改善なりを進めようと「考えている」学校は379校(1,026校中)、「現在検討中」は607校(1,026校中)あり、合わせて全体の96.1%になった。

#### イ 『活用』とはどのような学習活動か』について

「活用をどのような活動と考えているか」という問いに対して、小学校では「報告書や学習のまとめを作成する」(小259校 中86校)、中学校では「資料を読み取る」(小237校 中110校)が1位となり、この二つの項目で回答全体の7割に迫っている。文科省の「活用」についての例示もあつてか、これらを活用を意識した学習活動と考えていることが分かる。また「どのような場面で活用するか」については、「学んだことを他の教科や領域に役立てる」(小281校)、「日常生活に役立てる」(中120校)となり、この二つの項目で全体の7割程度の回答があつた。

#### ウ 『活用』を意識した授業改善を進めるに当たって、『単元計画の作成時』『1時間の授業』で重要なことは何か』について

活用を意識した授業改善を進めるに当たって、単元計画を作成する時に大切なことは「習得・活用・探究のつながり」を挙げる学校が、小学校では423校、中学校では154校と小中全体の半分を超えていた。次いで「子供たちの実態」「指導の手だて」が続いた。(図1P.9) 子供たちの実態を踏まえ、「習得・活用・探究」のつながりを考えて、指導の手だてを考えていくということであろうか。

1時間の授業で大切なことは、小中学校共に「話合いの場面」「資料(図・表・グラフ・文章)の読み取り場面」「学習の振り返り(シェアリング)場面」の順番で、この三つで小中全体の7割を超えている。(図2P.9) 活用を意識した1時間の授業とは、「資料等の読み取り」で得た知識や考えを基に「話合い」を行う。教師は話合いや学習活動の振り返りの手だてを考えていかなければならない。これらの学習活動のプロセスを大切にしたい授業改善を進めていくことと考える。

#### エ 「(平成21年度及び22年度に貴校では)『新しい学習指導要領』の理解を図るために、研修若しくは伝達を行いましたか」(平成21年7月調査実施)

小中学校共に、新学習指導要領の理解を図るための校内の研修会が、90%を超えて実施されている。小学校の方が校内研修の実施状況の割合が中学校に比べて若干高い。その結果、小学校では、学校の条件面では「学習内容の移行」「時間数・時間割」「教材教具の整備」、学習内容では「外国語活動」「言語活動の充実」を問題としている学校が多い。中学校では学校の条件面では「学習内容の移行」「時間数・時間割」「指導・評価」、学習内容で「言語活動の充実」「理数教育」を問題としている学校が多かった。

#### オ 「(貴校では)全国学力学習状況調査を基に、どのような授業改善に取り組みたいですか」

全国学力学習状況調査を基にどのような授業改善に取り組みたいかでは、小学校では「話合い」「単元の指導計画」「資料の読み取り」、中学校では「話合い」「単元の指導計画」「子供の見方」が挙げられた。資料の読み取りを基にした話合い場面を行う指導計画の作成が大切と回答した学校が多い。

以上のように学校現場では、新学習指導要領においても全国学力学習状況調査においても、「資料を読み取る」「話合い」「学習の振り返り」といった学習プロセスを大切にしたい授業改善を強く意識してい

ることが理解できた。

図1「単元計画の作成時」で重要なこと(校)

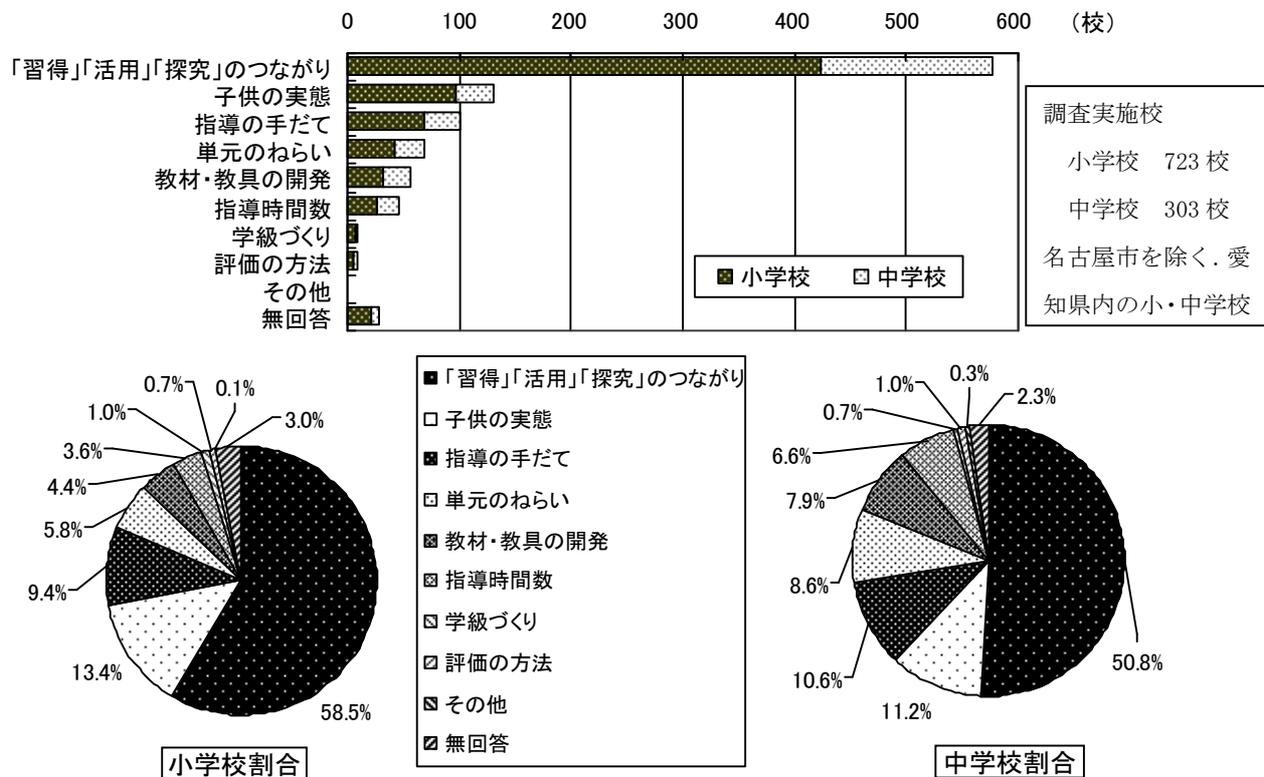
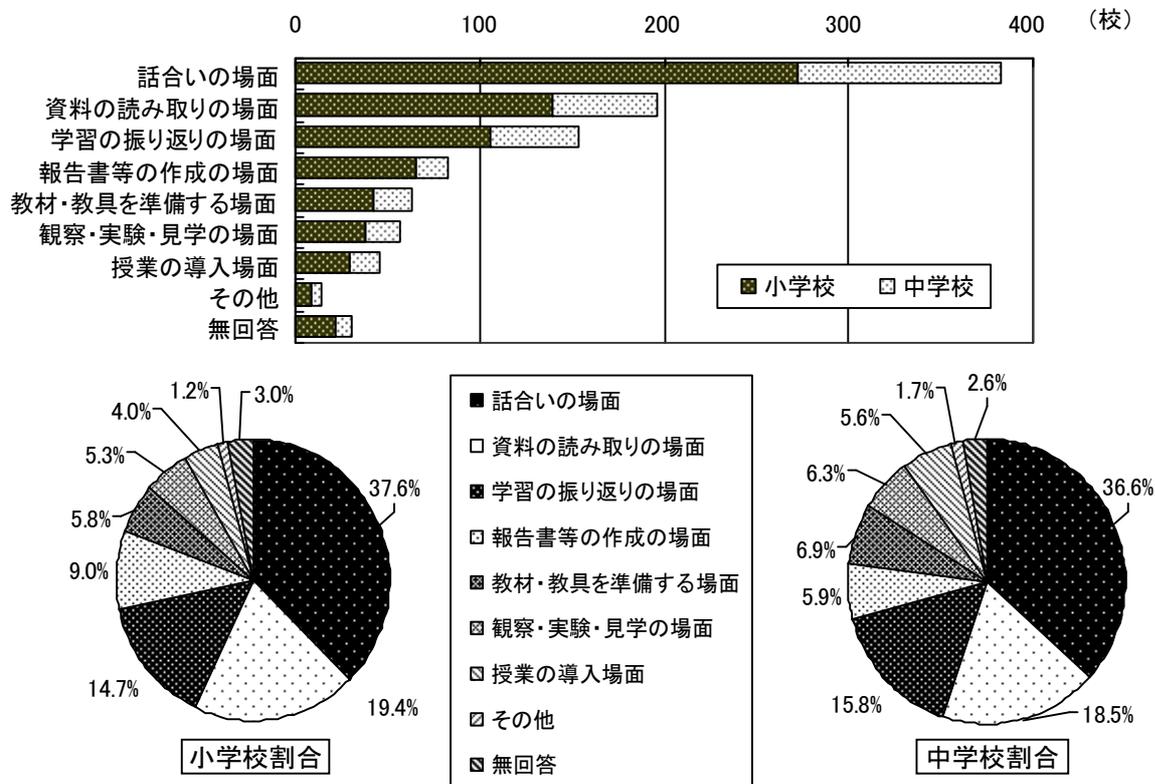


図2「1時間の授業」で重要なこと(校)



(8) 新学習指導要領で求められる「活用を意識した授業」とは

三つの学習活動である「習得」「活用」「探究」の中で、特に「活用」を意識した授業について考えてみたい。「活用」を意識した授業の具体的な学習活動としては「(ア)体験から感じ取ったことを言葉や非言語で表現する。歌・絵・身体表現などの方法で表現する。(イ)実験・観察・見学など事実を正確に記述・報告する。記録を丁寧に行う。(ウ)分かったことやまとめたことについて説明活動を行う。説明する中で、言葉を置き換え、理解を深める。(エ)グラフや図表などを用い、課題についてレポートをまとめる。コンピュータを駆使し、分かりやすい作品に仕上げる。(オ)課題や作品作りについて、仮説や見通しを立て実践し、評価する。仮説を検証したり、構想を練って創作活動をしたりする。(カ)学習の振り返りを行い、互いの考え方を伝え合う。ディベートやブレイン・ストーミングなどの発表方法やシェアリングの仕方についても工夫する」(注1)の6点が挙げられる。

授業改善を進めていくためには、「1「習得」と「活用」のつながりを考えた単元構成 2 学習プロセスを大切にした1時間の授業展開 3 「習得」と「活用」を踏まえた評価」の3点が大切な指針となることがわかってきた。その上で、次のような具体的な手だてを考えた。

2-① 子供たちを理解し、切実な教材を提示するための手だて 【教材開発・子供のカルテ】

【表3 学習プロセスを大切にした1時間の学習指導案「15年戦争と国民生活」】

| 学習プロセス                               | 学 習 活 動   | 指 導 上 の 留 意 点   |
|--------------------------------------|---|---|
| 学習の振り返り 2-④                          | 1 本時までの学習を振り返る。   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・戦争の広がり、戦争が起きた原因について思い出させる。(町内の戦没者が亡くなった場所の地図)</li> <li>・「15年戦争のときの国民の苦しみ」「韓国人たちの苦しみ」であることに気付かせる。</li> </ul>   |
|                                      | 2 学習課題について知る。   |   |
| 資料の読み取り 2-②<br>発表 2-③                | 3 聞き取り文集「戦争」を基にして、15年戦争のときの国民の苦しみについて話し合う。<br>(1) 戦争へ行った人の苦しみ<br>(2) 戦争へ行かなかった人の苦しみ                             | <ul style="list-style-type: none"> <li>・前時のうちに、聞き取り文集「戦争」を基にしてノートに書かせておく。このノートを読み直してから発表させる。自分の聞き取りだけでなく、友達の聞き取りを基に考えさせたい。</li> <li>・分かった箇所にラインマーカーを引き、それを基にして文章にまとめさせる。疑問点については？を付けさせる。</li> </ul>   |
| 学習の振り返り 2-④                          | 4 話し合いから、国民の苦しみについて、分かったことについてノートに書く。   |   |
| 資料の読み取り 2-②<br>発表 2-③<br>学習の振り返り 2-④ | 5 「日本に連れてこられた韓国人たち」のグラフを見て、韓国人の苦しみについて、予想をし、発表する。<br>(1) 兵隊として戦争に行った<br>(2) 工場や土木工事で働いた<br>(3) たくさんの韓国人の方が亡くなった | <ul style="list-style-type: none"> <li>・韓国がこの当時日本の植民地であったことを思い出させる。</li> <li>・グラフから、韓国人たちがたくさん日本に連れられてきたことについて理解させ、なぜ連れられてきたかを予想させる。</li> <li>・聞き取り文集「戦争」から分かる箇所に注目させたい。(土木工事や工場で働かされていた箇所)</li> <li>・グラフから大勢の方が亡くなった事実について気付かせたい。</li> </ul> |
| 資料の読み取り 2-②                          | 6 聞き取り文集「戦争」から、韓国人たちの苦しみについて分かったことをノートに書く。  |   |
| 発表 2-③<br>学習の振り返り                    | 7 本時で学習したことについて、分かったことについて発表し、ノートに書く。   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「15年戦争のときの国民の苦しみ」「韓国人たちの苦しみ」について、分かったことについて発表させ、その後でノートにまとめさせる。</li> </ul>  |

- 2-④ 「資料を読み取る」ための手だて 【ワークシートなど】
  - 2-③ 「話し合い」の手だて 【ディベート・ポスターセッション・ロールプレイなど】
  - 2-④ 学習の振り返りと感想交流の手だて 【シェアリングなど】
  - 3 「習得」と「活用」を踏まえた評価（今後の検討課題） 【座席表・ポートフォリオなど】
- 「(以下(9)では番号で表示)」などが有効な指針であることが分かってきた。

表3は【学習プロセスを大切にしたい1時間の学習指導案】の例で、小学校6年社会科の内容2-ケ「日華事変、我が国にかかわる第二次世界大戦」を取り上げた。この単元では夏休みの課題であった「戦争」にかかわる聞き取り学習の結果を文集としてまとめた。子供たちは身近なお年寄りや歴史民俗資料館の学芸員、ボランティアから聞き取りを行った。その文集と「美和町出身の戦没者が亡くなった場所の地図」(教師自作)「在日韓国人・朝鮮人の人数推移グラフ」を資料として取り上げ、15年戦争に行った人・戦争には行かなかった人・韓国、朝鮮の人の苦しみについて考える展開とした。この学習指導案の展開では「活用を意識した授業」として学習プロセスを大切にすることを考えている。

### (9) 授業改善の指針と「活用」を意識した実践例

【表4 「活用」を意識した授業改善のための指針 試案】

|  |   |
|--|---|
| 1  | 「習得」と「活用」のつながりを考えた単元構成                            |
| 1-①  | スパイラルな展開  |
| 1-②  | 逆向きの展開 1-①と比べて連続性は少ない                             |
| 2  | 学習プロセスを大切にしたい1時間の授業展開                             |
| 2-①  | 知識・技能の習得を図るため子供にとって切実な課題や教材と取り組ませること【教材開発・子供のカルテ】 |
| 2-②  | 「資料を読み取る」ための手だて 【ワークシートなど】                        |
| 2-③  | 説明活動のための「話し合い」の手だて【ディベート・ポスターセッション・ロールプレイなど】      |
| 2-④  | 学習の振り返りと感想交流 【シェアリングなど】                           |
| 以下の「3」(評価)に関しては今後の課題であり、実践の中でさらなる検討を加えていきたい。 |   |
| 3  | 「習得」と「活用」を踏まえた評価 【座席表・ポートフォリオなど】                  |
| 3-①  | 習得した知識・技能を確かめる                                    |
| 3-②  | 授業場面で資料が活用できるか確かめる                                |
| 3-③  | 関心をもち意欲的に探究できるか                                   |

以下の実践例については、**資料2** (P.26～)の「活用」を意識した実践例を参考にされたい。

#### ア 「活用」を意識した実践例1 『授業改善のための指針(1-①) 説明文の構成を理解し、自ら説明文を書く小学校国語の実践』

小学校4年・国語科「ヤドカリとイソギンチャク」の単元では、説明文の構成について基礎的・基本的な知識を習得し、その後で自分の説明文を書く学習展開となっている。国語科の特性を生かし、前時までに習得した事項を活用しつつ、新たな基礎・基本を習得していく。

本授業例では、まず「問い」(序論)と「答え」(結論)を書く。その上で「問い」と「答え」を結ぶ「説明」(本論)部分を分かりやすい言葉で、書き進める。根拠をはっきりさせ、実験や観察をする中で、結果がよく分かるように、適切な資料を選んで、読み手を説得する文章を作り上げる。書いた文章

を推敲して、直すとよい記述に気付く。学習した説明文の構成や集めた資料を基にして、課題に応じた説明文を書くことができる力を身に付けさせる展開となっている。

#### イ 「活用」を意識した実践例2 『授業改善のための指針（1-① 2-② 2-③）資料の読み取りと意見交流の場を重視した小学校社会科の実践』

小学校5年・社会科「わたしたちの生活と工業生産」の単元では、効率的に生産する工夫・消費者に届けられる努力・世界とのつながりの中での発展について理解した上で、自動車工業の今後の在り方について話し合う学習活動を考えた。社会科の場合、「習得」「活用」がスパイラルに展開している。

本授業例では、自動車を生産する海外工場のある国名を地図帳で確かめ、「アメリカに輸出された自動車の台数とアメリカで生産された自動車の台数」のグラフを読み取る。その上で、「工場について海外進出か国内の充実かどちらに重点を置くべきか」について、自分の意見をワークシートに書き、ディベートを行う。ゲスト・ティーチャーから現地生産の必要性と国内産業の振興の話聞き、まとめを行う。社会科では「資料を活用する力」「資料を読み取る力」を基に、ワークシートへの記入やディベートなりシナリオ・ディベートなりの発表活動を行うことで、思考力・判断力を高めることを目指している。資料を読み取り、解釈し、自分の考えをもち、意見を交流して深める場を設定することが大切な学習活動となっている。

#### ウ 「活用」を意識した実践例3 『授業改善のための指針（1-② 2-①）おもちゃづくりで、創造的な技能の習得を図る小学校図画工作科の実践』

小学校2年・図画工作科「ぱたぱた・びこびこ～動くおもちゃをつくろう～」の単元では、「習得」「活用」「探究」という学習類型を一体的なものとしてとらえる。「見る」（感性をはたらかせる）「考える」（発想・構想力・思考判断）「つくる」（形や色、材料、イメージを大切にすること）が一つの学習プロセスとして意識されており、「活用」の中で基礎的・基本的な知識・技能の習得が図られる。

本授業例では、動くおもちゃをつくることを通して、動く仕組みを理解したり、様々な表現方法を身に付けたりする。ストローと紙コップを使い、動く仕組みを理解し、仕組みの動きや形からつくりたいもの・楽しくなるものを考える展開となっている。これは「習得」と「活用」が一方向・双方向といったものではなく、「活用」を行う中で「習得」が自然と図られる学習活動の展開となっている。これらの展開は図工だけでなく、生活科・音楽科・体育科・家庭科などでより多く考えられる。

#### エ 「活用」を意識した実践例4 『授業改善のための指針（1-① 2-③）科学的な知識・技能の習得と説明活動を充実させた中学校理科の実践』

中学校2年・理科「気象とその変化」の単元で、各季節の天気の特徴を知った後、新たに提示された天気図の季節を推定する授業を考えた。これは、天気記号・等圧線・風向・前線などの科学的な知識を身に付け、それを活用し、提示された天気図について季節を予想する展開である。根拠となる特徴を挙げ、季節を推定した。これは資料を読み取り、分析・解釈する力を目指したものと言える。

本授業例では、天気図や気象衛星画像などのデータを総合的に分析・解釈し、ワークシートにまとめ、それを発表する展開を考えた。グループごとに分かりやすく説明するため、観察・実験の結果などを示したり展示したりするMD（マーケティング・ディスカッション：注2）法を取り入れ、発表の場を設け、意見を述べ合い交流することで、説明活動を行った。科学的な概念を利用して、考えたり説明したりする力の育成を目指したものと言える。

#### オ 「活用」を意識した実践例5 『授業改善のための指針（1-① 2-① 2-②）資料の読み取りと説明活動を重視した中学校数学科の実践』

中学校3年・数学科「標本調査」の単元では、総合的な学習の時間と数学による教科・領域に横断的となる構成とした。総合的な学習の時間で自分の問題意識を基にアンケートを作り、数学の時間でアンケートの集計・整理・分析を行い、再び総合的な学習の時間で発表会のためのポスターを作成し、発表する展開となっている。数学科では、身近な事象について標本調査を行い、問題を解決していく。

本授業例では、環境問題を取り上げ、ゴミの分別やキャップ集めの状況についてアンケートを実施する。コンピュータを使用し、グラフを作成する。作成した資料の読み取りを行い、発表し、発表内容について話し合う。言葉・図・式・表を使って説明する力を身に付けさせることをねらっている。自分の課題について、分かりやすい資料を用い、根拠を明確にして説明する活動を重視した展開と言える。

#### (10) 高等学校における新学習指導要領の告示

文部科学省は、小・中学校の改訂に引き続いて、平成21年3月に高等学校の新しい学習指導要領を告示した。今回の改訂では、小・中学校の学習指導要領と同じく、確かな学力に基づく「生きる力」を目指し、「言語活動の充実」が図られ、「習得」「活用」「探究」といった学習活動を重視することとなった。「理数教育」「食育と安全教育」「伝統文化の理解」「愛国心の涵養」なども重視され、小中高校12年間を視野に入れたカリキュラムの編成が目指されることとなった。

また、指導に当たって配慮すべき事項として、実態に応じ、義務教育段階の学習内容の確実な定着を図るために学習機会を設定することや、道徳の全体計画を作成することが掲げられている。

国語と数学に関する主な内容の改善については、**資料3-1, 3-2** (P34～)を参照されたい。

## 5 研究の成果と今後の課題

研究の成果としては、

- (1) 県内公立小中学校（名古屋市を除く）で新学習指導要領に関するアンケートを悉皆調査として実施した。活用を意識した授業づくりを通して、現状の問題点や課題について把握した。
- (2) 「活用」を意識した授業づくりを進めるために学習指導案を作成し、具体的な学力や指導方法の在り方について研究し、授業改善の指針について検討することができた。
- (3) 高等学校の新学習指導要領の国語と数学の主な改善点について研究を進めた。

今後の課題としては

- (1) 教科によって「習得」と「活用」のつながりが異なるので、その特徴を踏まえ、活用を意識した授業づくりを進め、学習プロセスを重視した様々な手だてについて検討していく必要がある。
- (2) さらに、「活用」を意識した授業の改善について、所内研究だけでなく学校現場と共同して研究を進めたい。「活用」を意識した授業づくりを進め、その中で小中高校を見通した授業改善の指針についてまとめていきたい。
- (3) あわせて「習得」と「活用」を踏まえた「評価」の在り方についても検討をしていく必要がある。

(注1)「第17回 授業フォーラム」(平成21年度 総合初等教育研究所主催)の神山弘氏による講演『新しい学習指導要領の趣旨の実現に向けて』より引用した内容 中教審答申の中に示された内容

(注2) MD法とは、グループ学習の一つで、子供たちの様子が市場での「売り手」と「買い手」の様子に似ていることから名付けられた。グループでまとめた内容を発表する時に、発表者和其他のグループへ情報収集に出掛ける者に分かれ、後で情報収集者が自分のグループの発表内容を吟味する。ジグソー学習と共に文部科学省が作成した資料集の中で紹介されている。